

子どもたちの育ちの時間と空間序章 — 哲学者、内山節の見解を中心に —

The Prelude to the Time and Space for Children's Growth
— Focusing on Japanese Philosopher, Takashi Uchiyama's Viewpoint —

山本 順彦*

Yorihiko Yamamoto

子どもたちの育つ環境は、過去の時代とは大きくその様相を変化させているように思われる。本稿においては、哲学者、内山節の子どもたちの育ちに関する見解に依拠しながら、子どもたちの育ちが抱えている現在の問題状況を、彼らが育つ時間と空間の二つの面からとらえたうえで、彼らの豊かな育ちを保障する時間と空間の創出のための視点を探っていく。それによって、今後、哲学者であり教育学者でもあるジョン・デューイの見解にもとづきながら、子どもたちの育ちを豊かに創造するためのプランを構想するための基礎となる観点を明らかにしていく。

はじめに

「親は無くとも子は育つ」とは、古より言い古されてきた言葉である。子どもは、生まれながらにして「生きる力」を持って、この世に誕生してくる。少々放っておいても、はたから大人がやんややんやお節介を焼かなくても自分の力でどんどん成長していくものだという事は、誰もが承知しすぎるくらいに承知していることである。子どもは、昔からそういうふうにして大人になってきたのであると言える。

しかし、近年の子どもたちの育つ環境は、昔とは大きく様変わりしているようにも思われる。子どもたちを取り巻く環境の変化には著しいものがあると考えられる。子どもたちの日々の生活や学びのあり様が大きく変化してきているというのは、否みようのない事実であると言えるのではないか。その中で、子どもたちの育ちの過程も大きく質を変化させているように思われる。

まず、子どもたちの生活の変化であるが、第一に、昔と違って、子どもたちは、屋外で思い切り遊ぶための空間を奪われてしまっている。徒党を組み、共同で交わりながら活発に力動的に遊ぶ空間が子どもたちの暮らす地域からほとんど消え去ってしまっている。しかも、児童公園などで集まって遊ぶ子どもたちは、せっかく場を共有しながらも打ち興じるのは、それぞれが手にするゲーム機を使ったゲーム遊びであったりするのである。かつての時代の子どもたちが遊び興じた「かくれんぼ」「鬼ごっこ」「缶けり」といった集団遊びに時を忘れる子どもたちの姿は、いまや見る影もない。

第二に、子どもたちの家庭内での生活の変化である。子どもたちは、家庭の「しごと」を言いつけられることは、もはやまずない。それらから解放されて、学校での成績の向上をめざす、ひたむきな家庭学習、塾通い、おけいこ事にいそしむ日常を送っている。家庭の一員としての役割を担い、家族の生活の維持のために家事労働に従事するようなことは、もはやなくなったと言ってもよい。

このようにみえてくると、今日の子どもたちは、自らの周囲の者や物との生き生きとした交わりを失い、それによって、地に足のついた日々の生活を奪われ、仲間や共同体や家族の一人としてではなく、「孤立化した」個人として毎日を暮らし、生き漂っているように思われる。過去の子どもたちと違って、豊かに成長していくための時間と空間を確実に失いつつあるように感じられる。放任しておいても、子どもは育つという時代は、すでに終焉を迎えたのかもしれない。まちがいなく、いまや、子ど

*こども学科教授

もたちの養育に当たる者たちが、子どもたちの育ちを保障するために、心を砕く必要がいろいろな意味で生まれていると言える。

本稿においては、哲学者、内山節がその著作『子供たちの時間』1)のなかで展開する、子どもの育ちに関する見解を手がかりにしながら、以上述べたような、子どもたちの現在の育ちの姿にかかわる問題を掘り下げ考察することによって、子どもたちが人間として豊かに育つことの意味、在り様について探ってみたい。

1. 子どもたちの時間における「いま」の喪失

まず最初に、子どもたちの生きる時間の問題について考えてみたい。いま子どもたちは、どのような時間のなかを生きているのだろうか。前述の内山の見解に沿って考えていくことにする。内山は、子どもたちが、いま生きることを強いられている時間について次のように言う。

人間は時間の経過のなかで生きている。人間の存在自体が時間とともにあるといってもよい。そして、人々はつねに現在という時間のなかで生きているのである。ところが、戦後の子どもたちにとっては、時間は経過し、過ぎ去りつづけるもの、それゆえに、うまく使い捨てながら未来へとむかうものでしかなかった。そういう存在であることを、戦後の社会は強制しつづけたのである。

そのとき、次のような問題が発生した。それは、時間を使い捨てながら生きることは、実は、その時間とともにあった自己を使い捨てながら生きることにつながる、ということである。ここから生まれてくるものは、自分の現実の時空を使い捨てながら、それを効率的に消費し、未来に向かって歩むという人生の作法である。

その作法からは、現実の喪失だけが生まれてくる。現在には目的も意味もなく、未来へとむかう消費の過程にすぎないのだから、そうである以上現実に存在している自己は、たえず未来への過程のなかで喪失されていくしかないのである。2)

子どもたちを含めて、現代という時代に生きる人間は、未来に向かって歩むために、本来、現在を生きるために存在しているはずの、その自己を「使い捨てながら」、今という時間を生きることを強いられている。そして、そのことによって、現実に存在している現在の自己を喪失するという状況に置かれている、というのである。

時間を使い捨てるとは、どのようなことを意味しているのか。それは、その時間とともに存在している自分を使い捨てることにほかならない。こうして、将来の自分の存在を確立するために、自分自身を使い捨てながら生きていくという新しい人間たちが誕生してくることになる。それが現代人である我々の姿だといってもよい。時間を使い捨てることによって、その時間とともにあった自分自身を使い捨てる、ここに現代という使い捨ての時代が展開していくことになるのである。

そして、このような生き方をするようになったとき、人間は、自らが本来もっていた根本的な生きる情熱を失うことになったのである。自分自身が時間とともに使い捨てられていくのであれば、人間は、そのような自分の生きる営みに情熱をもつことができるであろうか。情熱をもって何かを確立しても、それもまた使い捨てられていく過程のなかで、現代の人間は、身を置いているからである。その結果、ある課題を達成する必要があると感じたときには、その課題を成し遂げようとするが、それは、単に生きていくための手段としてなされる行為なのであって、人間的な情熱がそのような行為をさせているわけではないのである。

要するに、現代を生きる人間は、「自分のため」に時間を創造するようになったのである。かつて行

われてきたような、他者との関係の中で時間が創造されるのではなく、これからも生存し続ける「自己という他者」との関係のなかで、時間をつくりだし続けるようになったのである。ここに裸にされた現代の個人の姿があるといってもよい。自己のために自己を創造する「個人」、自己の時間のために自己の時間を創造する「個人」が、登場してきたのである。

とすると、このような現代の個人たちは、どのようなかたちで、時間を創造しているのだろうか。内山は、この点について、さらに次のように言う。

時計に示された客観的な時間秩序を受け入れ、その時間を、合理的に、有効に配分＝消費することによってです。

ここに、きわめて屈折した現代人の姿があるように思われます。一方では現代の私たちもまた時間を創造しつづけています。将来の自分の時間を「他者」として、この他者と関係を結ぶことによって時間を創造するのです。ところが、この時間創造の前提として、けっして創造されることのない時間、つまり客観的な時間秩序でしかない、時計に表現された不可侵の時間を受け入れます。そのことによって、現代の時間に支配されながら、そして時間に支配されているがゆえに、時間を創造するために、時計の時間を配分し、消費していくのです。3)

このように、現代を生きる人間にとっての時間の創造は、与えられた時間秩序のなかで、いかにかまく時間を消費するのと同じことになってしまったのである。一方では未来の自分のために現在の自分の時間を消費し、他方では時間秩序に支配されながら生きる人間が、このように誕生したのである。時間の個人主義的な創造者になろうとして、時間の支配を受ける、それが今日の我々人間の姿だといってもよいのである。

そして、このような習慣を受け入れ、人生を経営するように生きていくようになる、それが現代の子どもから大人への成長の道になってしまったのである。自己中心的な時間感覚を身につけながら、時間の絶対的な支配に身をゆだねる、その屈折を受け入れていながら、子どもたちは、大人へと成長していくのである。

したがって、子どもたちにとっての育ちの時間は、まさに、次のごときものである、と内山は言う。

子どもたちも、未来の自分の時間経営が破綻しないように、現在の時間を手段として消費しています。自分だけの孤立した時間を意識しつつ、未来の自分を他者として、その他者と関係を結ぶことによって、現在の自分の時間を創造し、結果としては時計の時間に支配されながら、時計の時間の消費の仕方だけを問題にするしかなくなったのです。こうして、子どもたちもまた、現在の自分を時間とともに消費しつづけることによって、未来の自分の時間経営の仕方を身につけたのです。4)

未来のためにいまの時間をどう使うかだけが課題になり、もっとはっきり述べてしまえば、未来の時間のためにどのように行動するのが、自分にとって利益になるのかだけが関心事になってくるでしょう。5)

今日の人間は、大人たちも子どもたちもともに、まさに、自分の人生を「経営感覚」でとらえているのである。自分の人生が破綻しないように、「人生の経営計画」をつくり、できるだけ忠実にそれを実行に移す、それが賢い人生の送り方とみなされているかのようである。現代人は、準備することに人生の価値を見出すようになっていったのである。進学のための準備、就職のための準備、老後のための準備、すなわち、個人としての自らの将来の利益をはかること、それが人生を経営するうえで最も確かな方法だと思われるようになってしまったのである。

2. 子どもたちの生活世界における「交わり」の喪失

人間にとっての時間、子どもたちにとっての育ちの時間のこのような変化は、人間の、そして子どもたちの生きる空間、すなわち生活世界の変化をも呼び起こすことになる。この点に関わって、内山は、次のように言う。

大地の上に人間が誕生して以降、長い間人間たちは、時間は循環すると感じながら暮らしてきました。朝になれば、昨日と同じ朝が還ってくる。春になれば、昨年と同じ春が還ってきたと感じながら、人々は暮らしていたのです。森では老木が倒れ、若い木々が前と同じ森をつくりだし、川の水は永遠の循環をとげながら存在していました。

小さな時間循環も、大きな時間循環もあります。時間はたったひとつのものではなく、さまざまな時間循環とともに、多様に存在していたのです。

自然や、人間たちの共同の営みが、このような時間世界を成立させていました。自然の移ろいが循環としてとらえられたのは、人間たちが、自然とともにある循環系の暮らしをしていたからです。おじいさんのように歳をとり、お父さんのように、お母さんのように大人になっていく世界がありました。毎年春になれば種を播き、秋になれば収穫をする世界があったのです。村には、村人同士が支えあいながら、地域社会を永遠に循環させていく知恵が蓄積されていました。

こうして循環系の村人の暮らしと、自然の動きが関係を取り結び、農民たちの循環する時間世界を創造し、成立させていたのです。

おそらく、その頃は、時間は人間を支配するものではなかったことでしょう。なぜなら自然と関係を持ち、村の共同性と関係をもつなかに創造される時間が唯一の時間であり、人間も時間の創造者でありつづけたから、時間は自分の営みとともにあるものであって、けっして人間の外に確立された支配者ではなかったのです。

このような時間世界が存在していた間は、子どもたちも、自分がどんなふうにな大人になっていけばよいのかを知っていました。歳とともに大きくなっていく自分の役割をはたしていくこととともに、村の時間も存在しつづけるのです。

現代人たちが失ったのは、こんな時間世界であり、人間の存在の仕方でした。そしてそのとき、時間は人間の営みとともに創造されるものではなく、客観的な時間秩序であり、時間という価値基準に変わっていたのです。時間は、人間たちが他者と関係を取り結ぶなかに創造されるものから、人間を支配する客観的な基準になっていったような気がします。人生の経営が破綻しないように、つねに、いまの時間を使い捨てるのです。

時間に支配されながら、同時に時間を手段として使い捨てる、ここに現代人の時間に対する習慣が生まれているように感じます。未来の自分を「他者」とすることによって創造される時間とは、未来のための手段にされ、使い捨てられていく時間でもあるのです。6)

少々長い引用になったが、内山の言わんとするところは、次のようなことである。かつて人間は、村落共同体のなかで生き暮らし、季節の移ろいととも「循環する時間」を、その共同体の他者と交わり、たしかな役割を担いながら存在していた。しかし、いまや人間は、そのような他者との交わりを失い、未来の自分を「他者」として、現在の時間をその手段としつつ生きる孤立した存在と化したのである。そして、自らの人生を「経営感覚」でとらえる孤独な「個人」となったのである。

人生を経営感覚でとらえるとは、自分の人生を、自分だけの力でつくりだそうとすることにほか

なりません。自分の人生は自分でつくると言えば勇ましく聞こえますが、ここでは、自己を存在させるための関係の世界や、他者との関係が無視されてしまいます。・・・(中略)・・・他者は自分にとっては無関係なものになり、「裸の自己」が存在しているだけです。7)

子どもたちもまた、このような他者との関係性を喪失した世界のなかを生きることを強いられている。そして、子どもたちは、このような空間のなかで、未来に消費され、消滅していく時間のなかを生きる存在と化しているのである。そのような時間を生きることを余儀なくされる子どもたちは、必然的に、たえず消費され、消滅していく孤独な存在空間のなかに暮らさなければならないのである。

3. 子どもたちの生きる時間と空間の創造

このような現代の時空を生きる子どもたちが、その時空のもつ問題性を超えて、充実した時間と豊かな生活世界を生きることを可能にするための方法が探られなければならない。内山は、この点にかかわって次のように言う。

私たちは他者をとらえることによって、その他者とともにある時間をも認識するのである。そして、他者の時間との間に関係をとり結ぶとき、自己の時間と他者の時間との間に協同の空間が形成されるのである。

エピクロスは、空間の内部では粒子（原子）が高速で動いていると考えた。私は人間の存在空間の内部には時間の動きがあるのだと思う。ただしその時間は単純ではない。もしも自己の時間だけが一方的に動いているのだとすれば、そこに生まれた空間はずいぶん貧困なものであろう。ここでは人間は貧困な空間のなかに存在していることになる。逆にいくつもの他者の時間が発見され、自己の時間と他者の時間とが幾重にも関係を結びながら共鳴しあい、ここからさまざまに協同的な空間が創造されていくとき、そこには豊かな空間、奥行きのある深い空間があり、豊かな人間の存在が形成されているといえるのではないだろうか。8)

人間が豊かに生きることができるといえる生活世界、すなわち空間は、他者とかかわり、共有することのできる時間を生きる時に出現するのである。「創造的な存在空間をつくりだすためには、時間を創造する主体に、子どもたちがならなければならない」9) のである。この点にかかわって、内山は、さらに次のように言う。

私には創造とは、他者と自己との関係のなかに展開しているように思える。ここでいう他者とは、他の人々のことだけではない。自然もまた人間にとっての他者である。社会もまたひとつの他者であり、建物、空、川、海、学校、あるいは学問や知識、文学、芸術といった他者もありうる。

他者とは自分が関係を取り結ぶ対象のことなのである。だからそれは、自分の外に実在しているものことではない。なぜなら、自己との間に関係が成立しないかぎり、人間はそれを他者としてとらえることができないからである。

つまり、他者を認識することと、他者との間に関係をとり結ぶことは同一のことなのである。たとえば、自分の近くに木材が積んであったとしても、その木材と関係を結ぼうとしていないときは、そこに積んであるものが木材ではなく鉄骨であったとしても同じことである。ところがそれを片付けようとして関係をもった瞬間に、それが木材であるのか鉄骨であるのかが問題になりはじめる。

その木で何かをつくろうと考えたときも、積み立てられている木材が、自己にとって有意義な他者と

して認識されはじめるであろう。こうして、ある人は木材を切り、何かをつくりはじめる。そうなれば、他者としての木材との関係はいつそう深まる。知らず知らずのうちに、その人は、他者としての木のいろいろな性質を学んでいくことにもなるだろう。

このような他者との関係が、他者と自己との協同を成立させ、創造という行為をつくりだしていくのである。

それは次のようなことに対してもいえるだろう。現在の教育システムのもとでは、数多くの知識が教えられる。それが知識偏重を招き、人間性をゆがめる結果になっていると指摘する人々がいる。だがそれは十分な指摘なのだろうか。現在の教育システムの問題は、学問や知識が自分の外部に存在し、自分の前を通り過ぎるだけのものになっていて、学問や知識が自己にとっての他者であり、自己と関係を取り結びながら、協同して何かを創造する相手であることが認識できないことにあるのではないだろうか。知識に問題があるのではなく、知識を他者として自己が存在する時空を創造することができない教育のあり方にこそ、問題はあつたのではないだろうか。

他者を認識することは、他者と協同した創造を成立させ、また創造の過程が新しい他者を発見させるのである。

そして、そのとき、自己の時間の動きと他者の時間の動きが共鳴する。それぞれの他者とともにある時間の動きと、自己の時間の動きが共鳴するのである。10)

これもまた、少々長すぎる引用になったが、内山の、「協同における『他者』の意味、その他者との協同が人間にもたらす意義」についての見解が明確に表出されている部分なので、省略を加えず、そのまま引くことにした。内山の言わんとするところは、すなわち、人間が協同のなかでかかわる他者とは、ただ人間のみを意味しているのではない。人間を取り巻く環境のなかに存在する、自分以外の人間たちも含めた、ありとあらゆるもの、それらすべてのものが人間にとっての他者だと言うのである。人間が環境にかかわって何事かをなそうとするとともに、意味をもって繋がり合う者と物、それらすべてが人間にとっての他者だと言うのである。それら「他者」が人間のなす行為に深くかかわりをもって、働きかけるときに、その「他者」は、人間にとって大きく意味をもつものとなるのであり、それら「他者」協同が人間の生きる時空を豊かに創造していくことになるというのである。

したがって、子どもたちが自ら生きる時空を豊かなものとして創造していくためには、「子どもたちは何が必要なのかを発見していければよいのである。その他者が学問や知識であるとき、子どもたちは自分の存在の自由さをつくりだすために、学問や知識と関係を結ぼうとするだろう。その他者が自然や友人であるときも、やはり自分の存在の自由さをつくりだすために、自然や友人と関係を結ぼうとする」11) ののである。そして、「そのような存在の創造のなかに、さまざまな『学び』の世界が生まれているはずなのである。そこに、ある方向性にむかって引き上げるのとは異なった「成長」の世界もつくられているはず」12) なのである。

個人とは、「個という理念として存在しているわけではない。むしろ、他者とのたえざる関係のなかに存在しているのが個人である。ここでも他者とは、他の人々でも、社会でも、自然でも、学校や学問、知識であってもよい。それは自分が存在する空間をつくりだすために、自己との間に関係を結んだ他者である。とすると個人は、さまざまな他者との関係の総和によってつくられている空間のなかに、存在している」13) ことになるのである。「自我や意志の強さが、強い個人をつくりだしているのではない。他者との間に守らなければならない関係をもっているとき、人間はその関係を守るために強い意志を発揮するのである。すなわち、さまざまな他者との間に多様な関係がつけられ、それらの関係が自己の存在の創造にとってかけがえのないものであるとき、人間はさまざまな場面で強い意志を発揮する。強い個人をつくりだそうとするなら、豊かな

関係をもちながら存在する個人をつくっていく必要がある。そのことを視野に収めずに、何ものにも影響されないたった一人の人間としての強い個人を求めれば、それはただ傲慢で孤立した弱い個人をつくりだしていただくことだった」14) ののである。

おわりに

以上、哲学者、内山節の見解に沿いながら、子どもたちの育ちのための時空が、いま持つ問題性、それを乗り越えて、子どもたちの豊かな成長を保障する時間と空間の創出を導くための方途についての考察を進めてきた。要するに、内山の見解にしたがえば、子どもたちの育ちの時間と空間は、過去のそれとは、異なって、時間においては、未来のために現在を切り捨て、犠牲にするものと化したのであり、空間においては、自己を取り巻く環境という意味における「他者」との交わりをいっさい切り捨てた「孤立化」した生活世界へと変貌を遂げてしまったということなのである。このような時空を生きることを強いられる子どもたちには、豊かに自らを成長させるための機会が奪われてしまっているといっても過言ではないのである。

子どもたちが充実して生きることを可能にする時空を創造するためには、子どもたちが「いま」という時を、環境という「他者」と豊かに交わりながら生きることを可能にする「ここ」の創出こそが不可欠のことになるのである。それによってしか、子どもたちが、「孤独な人生の経営者」と化した大人たちの人生の行路を自らもまた歩むことを回避し、一瞬一瞬の時を充実して他者と豊かに交わり、自らを「時間と空間の主体」として地に足のついた、たしかな人生の歩みを歩む道を創り出すことはできないのである。

本論文は、子どもたちの育ちのあるべき姿を探るための手始めとして、内山の論に依拠しながら、その在り様を考えた。今後は、さらに、20世紀初頭から中葉にかけてアメリカの地において、子どもの成長についての新しい理論と思想を展開した、哲学者であり教育学者でもあるデューイ (John Dewey, 1859～1952) の経験論、コミュニティー論、教育論 15) などに検討を加えながら、今回の考察をさらに発展させていければと考える。

〈注〉

- 1) 内山節 (内山隆) は、人間の労働過程と自然との関連を思索し、究明し続けているわが国の哲学者である。その思索のなかで、彼は、循環する時間のなかを自然との交わりのなかで展開されていく共同体的な労働こそが、人間の本来の存在の在り様を示すものであることを強く訴える。こうした見解を子どもの育ちの理論として展開したのが『子どもたちの時間』である。
- 2) 内山節著『子どもたちの時間 (内山節著作集 11)』農文協, pp. 201～202, 2015
- 3) 同上書, p. 129
- 4) 5) 同上書, p. 135
- 6) 同上書, pp. 130～131
- 7) 同上書, p. 81
- 8) 同上書, pp. 206～207
- 9) 同上書, p. 203
- 10) 同上書, pp. 203～205
- 11) 12) 同上書, p. 210
- 13) 同上書, pp. 211～212
- 14) 同上書, p. 212

15) デューイは、その著『経験と教育』（“Experience and Education” Collier Books, 1977）の中で、子どもの成長を促し、保障する経験のあるべき姿を、経験の連続性と相互作用性の観点から論じている。また、『学校と社会』（“The School and Society”、The University of Chicago Press, 1974）『民主主義と教育』（“Democracy and Education”、The Free Press, 1966）などの著作において、社会やコミュニティー（共同体）と有機的に結びついた教育の在り様を追究するなかで、子どもの成長を導く教育の理論を展開している。